

遊び集団内における幼児の対人葛藤と対人関係に関する研究
—対人葛藤発生原因および解決方略と子ども同士の関係—

山本 愛子¹

A study of interpersonal conflicts in free play situation and interpersonal relations:
Difference in the cause of interpersonal conflicts and social problem solving for
interpersonal relations in preschool Children

Aiko Yamamoto

This study examined the social problem solving of the interpersonal conflict situations in preschool children. Children's strategies in free-play session were observed and analysed to examine whether the strategies adopted for resolving conflicts would be different when they were in conflict with the same-age members or with the different-age members. The relationships among the children were also varied in terms of children's membership in the same or different play groups. Eighty-seven preschool children of 4, 5 and 6-year-olds (45 boys and 42 girls) were observed in free play situation. Observations were made once a week from May 1993 to December 1993 and videotaped. A total of 140 conflict episodes were collected and analysed. The results indicated that children adopted different strategies for resolving the conflicts according to the group membership of their rivals and that the quality of social problem-solving strategies changed with age from egoistic responses to social responses. It was also found that in the cause interpersonal conflicts and the social problem solving were related to membership of the conflict situations with their peers. Implications of these findings were discussed in terms of the development of social cognition.

Key words; interpersonal conflicts, social problem solving, preschool children, interpersonal relation, different-age members

子どもは仲間と遊ぶなかで社会性を身につけていくといわれている。子どもの心性の特徴である自己中心性は、仲間との遊びを通して矯正されるものであり、他者との円滑な対人関係の技術や協同の技術、あるいは社会的ルールは、そのなかで次第に学習されていくといつてよい。また、遊びは、パーソナリティの発達や形成にも役立つといわれており、幼児は遊ぶことの中で、自発性、自己調整能力、自信、フラストレー

ション耐性、創造力、協調性などを高めながら、社会的にコンピテントな人間へと成長していくのである。しかし、複数の子どもがともに遊びを成立させ、それを展開させるためには、遊び集団内において自他との調整が必要であるため、自分と年齢の近い仲間と一緒に遊ぶことは、それほど容易なことではない(高濱, 1995)。従来、自己調節機能や子どもの社会性の問題は、主に母子関係を中心に検討されてきたが、最近では子ども同士の関わりが焦点があてられ、特にそこから派生する対人問題(けんか)などを検

1 広島大学大学院教育学研究科博士課程後期

討した研究が多い。Shantz & Hobart (1988) は、子ども同士の間で発生した対人葛藤は、社会的・認知的発達、社会言語習得を促す場であることを主張しているが、このように対人葛藤を解決するためには、相手の意図や欲求を相手の言動より鋭敏にかつ正確に読みとり、それに対する自分の意志や欲求を的確に主張しながら、自他双方の言い分を調整する能力が必要である(山本, 1995a)。適切な行動の基礎には、自我の発達、他者理解、自己統制、コミュニケーションなどの諸能力が存在する(朝生・木下・斎藤, 1986)が、特に対人葛藤は、様々な社会的関係を学習したり、他者の存在や意図を知ることにより自分の考えを主張する方略を学習する貴重な機会であると考えられる。これまでほとんどの時間を親子という縦のつながりの中で過ごしてきた子どもたちにとっては、幼稚園への入園は、自分と同年齢の多数の子どもたちと横のつながりを築かなければならない新しい環境への移行であり、山本・ワップナー(1991)はこれを、危機的移行の時期といている。子どもは、幼稚園や保育所に入園することによって、親子関係から同年齢の友だちとの仲間関係へと対人関係の世界を駆け、集団生活を体験しながら、移行過程において様々なコミュニケーションスキルを学習していくのである。しかし、最初はまだ新しい環境に適應した十分なスキルが獲得されていないため、子どもは多数の同年齢の仲間との間で、多くの危機的移行にさらされる。新奇な関係においては、それまでとは異なった相互作用が要求されるため、その関係に適切な社会的スキルを身に付けなければならない。仲間関係を築く過程においては、友だちとの衝突が多発するが、子どもはこの「けんか」、即ち、「対人葛藤(interpersonal conflicts)」を経験し、何度も混乱状態に陥りながら次第にその状況に適應した、あるいは新しい人間関係に適應した有効な相互交渉能力を獲得していくのである。これは、他者との効果的な相互交渉を行うために必要な社会・認知的能力である社会的問題解決(Social problem solving)能力(東・野辺地, 1992)を指している。

子どもの「対人葛藤」に関する従来の研究においては、トラブル(本郷・杉山・玉井, 1989; 本郷・玉井・杉山, 1992; 玉井・杉山・本郷, 1989; 玉井・本郷・杉山, 1992; 杉山・玉井・本郷, 1989; 杉山・本郷・玉井, 1992)あるいはけんか(朝生ら,

1986)、いざこざ(朝生・荻野・斎藤, 1988; 無藤, 1992)など様々な用語で表現されているが、それぞれの用語についての定義は曖昧で、今のところまだ研究者間で明確な一致した見解が得られていない。このため、本研究においては、トラブル、けんか、いざこざなどを包括するものとして対人葛藤を位置づけ、さらにこの対人葛藤を、個人の欲求・目標・期待が、他者によって妨害されていると個人が知覚するときには生じる対人的過程であり、感情・認知・行為を含むもの(藤森, 1989)と定義する。近年、子どもの対人葛藤については、対人葛藤発生原因の中でも乳幼児時期から幼児期にかけて最も多くみられる「物をめぐる争い・物の所有」に関して検討した研究(Genishi & Dipaolo, 1982; 青井, 1983, 1984; 朝生ら, 1986; 本郷ら, 1989; 玉井ら, 1989; 杉山ら, 1989)が盛んに行われている。また、同年齢同士の間において対人葛藤が発生するまでの二者間の行動を観察した先行研究は、対人葛藤の発生率、継続時間および争点となる問題(発生原因)、結果(社会的問題解決方略)などを明らかにし(Shantz, 1987; 倉持, 1992; 山本, 1994)、幼児の社会的認知能力や社会的コンピテンスと仲間との対人関係の発達との関連について言及している。しかし、幼稚園や保育所における対人関係には、仲間関係と同時に保育者との関係があること、また、仲間関係の中にも、同年齢集団と異年齢集団の関係があることを忘れてはならない。これまで子どもの対人葛藤場面での行動の特徴と保育者の対応の关系到焦点を当てた研究(本郷ら, 1992; 杉山ら, 1992; 玉井ら, 1992)は、わりあい多く行われており、幼児の対人葛藤の解決過程を理解する上で、保育者の働きかけが重要であることが指摘されている。ところが、これまで上述してきたすべての研究は、同年齢集団における対人葛藤を研究対象としており、異年齢集団に対してはまったく焦点を当てて検討していない。

Hartup (1978) は、子どもの異年齢集団行動では多様な姿が観察され、様々な学習がなされていることを指摘している。例えば、自分より年少の子どもとの間では、世話をしたり、援助する行動がみられ、同年齢同士の間では、攻撃行動や受容などがみられ、自分よりも年長の子どもの間では、依存の要求や援助されることを求める行動などが報告されている。また、佐藤(1986, 1987)は、年齢の異なる2人の幼児

に対してある共通課題を設定すると、年長児が年少児を援助することを観察しており、援助行動の生起を規定する要因として、2者間の幼児の年齢差を指摘している。これらの結果を踏まえ、子どもはすでに幼児期から、同じ様な状況に立たされた場合でも、自分の欲求を通すために用いる方略を、相手が自分と同年齢であるか異年齢（年上、年下）であるかによって使い分けていることが予測される。その他、Furman, Rache, & Hartup (1979) は、同年齢集団において孤立し、自己概念が低下している孤立児を異年齢集団の年長児として位置づけることで、孤立児の自己概念や社会的スキルの変化を検討した。その結果、研究過程において、孤立児の自己概念と社会的スキルに肯定的な変化が見られたことを報告している。そして、異年齢集団行動は、集団メンバーの達成目標が一元化されていないため、誰もが目標を達成することが可能であり、自己概念や社会的スキルを高める性質を持っているのではないかと説明を加えている。これらを踏まえ、本研究では、異年齢集団における関わり的重要性に注目し、特に異年齢集団での遊びにおいて発生する対人葛藤に注目した。おそらく、危機的移行期にある幼児は、対人葛藤場面において社会的問題解決を迫られた場合、相手と自分との対人関係を考慮しながら方略を選択しているものと考えられる。そしてまた、異年齢の仲間に対する対応は、同年齢の仲間に対する対応とは異なっていることが予測される。しかし現在、実際に幼児の対人葛藤場面を自然観察し、これらの点を詳細に検討した研究はみあたらない。自然場面を観察した場合、条件の統制ができない（遊び集団の大きさ・人数、遊びの種類、遊具の数や状況、文脈の違い）こと、記録面の困難さ、データ数の問題など、解決に困難な問題が多かったために手がつけられてこなかったといえる。ところが、対人葛藤について検討したGenishi & Dipaolo (1982) は、実験室場面で扱う集団の中での対人葛藤過程と自然場面における集団の中での対人葛藤過程では、相違がみられることを指摘している。従って、本研究においては、子どもの日常生活における遊び場面において生起する対人葛藤場面を自然観察することを通して、子どもの対人葛藤について、その原因や問題解決方略を含めた一連の流れを検討することを目的とした。また、これまで幼稚園の自由遊び場面を観察した倉持

(1992) は、対人葛藤場面で使用される方略が、当事者たちが同じ遊び集団で遊んでいた際に生じたものであるか、あるいは異なる遊び集団において遊んでいた際に生じたものであるかによって異なることを明らかにしている。従って、本研究においては、当事者たちが同じ遊び集団で遊んでいた際に生じた対人葛藤状況に特に注目する。

以上の点を考慮し、本研究では、第一に、同年齢と異年齢の両方を含んでいる幼児の遊び集団において、同年齢間（年中児同士間）および異年齢間（年少児と年中児の間、年中児と年長児の間）で発生する対人葛藤の原因は何であるのか、また第二に、対人葛藤を生じさせた原因を作った相手の年齢の違いによって、ネガティブな行為を受けた側の幼児（年中児）が、対人葛藤生起時に用いる対応はどのような社会的問題解決方略であるのかについて、幼児の対人葛藤と対人関係の関係を検討することを目的とする。これらを明らかにすることによって、幼児の対人認知と社会的問題解決能力の関性と社会性の発達を解明することができるものと考えられる。

方 法

対象児：観察対象となったのは、東広島市のF幼稚園の園児、計87名であった。そのうちわけは、年少児1クラス19名（男児9名、女児10名：観察開始時の平均年齢3歳6カ月）、年中児1クラス36名（男児18名、女児18名：観察開始時の平均年齢4歳5カ月）、年長児1クラス32名（男児15名、女児17名：観察開始時の平均年齢5歳5カ月）である。なお、年少児と年中児は4月入園児であり、年長児は保育歴2年目の園児であった。

日時：1993年5月上旬から6月上旬までと、9月上旬から12月中旬までの期間中に、平均して週1回ずつ計17回の観察を行った。1回の観察時間は、朝9時から11時までの午前中の好きな遊びをする時間（自由遊びの間）に行った。

場所：観察を行った場所は、幼稚園の園舎（遊戯室、年少児・年中児・年長児の各保育室）と園庭（サッカー場、砂場、水場、裏庭、築山、ジャングルジム、ゆりかごなどを含む）であった。

観察内容：第一に、同年齢と異年齢の両方を含んでいる幼児の遊び集団（3名以上）において、同年齢間（年中児同士間）および異年齢間（年少児、年中児、年長児）で発生する対人葛

藤の原因は何であるのか記述した。なお、異年齢間で生じた対人葛藤に関しては、対人葛藤を生じさせた原因を作った側の幼児の年齢の違いに注目して分類している。第二に、対人葛藤が生じた際に用いられた対応は、どのような社会的問題解決方略であるかを記述した。なお、同年齢および年上・年下（異年齢）の仲間が幼稚園に存在する年中児を中心に観察データを集計した。

手続き：観察は、保育に参加しない観察者という立場をとって行った。事例収集にあたっては、同年齢（2名以上）および異年齢（1名以上）を含んでいる幼児の遊び集団を対象に、その自由遊び場面中に幼児の間で自然に対人葛藤が生じるのを待ち、対人葛藤発生後、その終結までを一つの事例として記録した。記録にはビデオカメラを用い、園児の行動を撮影すると同時にその時の会話を音声録音した。なお、ある子どもが他の子どもに対してネガティブな言動をとった場合を“事例開始”とした。また、対人葛藤場面から当事者の一方が立ち去った場合、当事者のどちらかが謝った場合、保育者によって解決された場合、その他、対人葛藤が解決したと見なされる発話や行動が出された場合などを“事例終結”とした。

分析方法：ビデオ再生によって、各対人葛藤場面に関する音声記録を文字化し、各事例について、対人葛藤発生時の遊び内容、事例開始者の言動、事例開始者が誰に向けて行為を行っているか、その後両者がどのような方略を使用したかその相互作用の過程を記述した。また、対人葛藤に直接関係していた当事者のみならず、間接的に遊びに参加していた子どもたちや周囲の文脈なども記録した。17回の観察データは、2名の評定者がカテゴリー分類して分析した。各カテゴリー分類における2名の評定者の一致率は、対人葛藤発生原因については92%、対人葛藤が生じた際に用いた問題解決方略については84%であった。問題解決方略は、①泣きによる解決、②攻撃的報復解決、③第三者介入解決、④主張的解決、⑤威嚇解決、⑥消極的解決、⑦協調的解決の7カテゴリーに分類した。なお、これは東・野辺地（1992）を参考に作成したカテゴリー分類である。幼児の行動観察の際に、対象児がなぜその方略を行ったのか判断が困難であった13事例に関しては、対人葛藤の終結後に対象児が落ち着いたのを見計らって、「どうし

てあなたは先ほどのような行動（問題解決方略）をとったのか？」と直接対象児に尋ね、その理由を回答してもらったので、カテゴリー分類の際にはその回答を優先させた。また、事例収集の際に、できるだけ同一人物が関わる対人葛藤が重複しないように努めた。しかし、一名が対人葛藤の片側の立場（対人葛藤の原因を生じさせた側か否か）に最高2事例まで関わっている場合もある。

結果および考察

同年齢と異年齢の両方を含む遊び集団内で発生した対人葛藤に関わる当事者の対人関係と葛藤発生原因

同年齢および異年齢のどちらをも含む遊び集団内で発生した対人葛藤を観察した結果、その発生原因は対人関係の違いに関係なく「物の取り合い」、「不快な働きかけ」、「ルール違反」、「遊びに関する意見のズレ」、「偶発」という5つの原因（Table 1参照）に分類することができた。これは朝生ら（1986）や山本（1994）の結果とも同様であり、その頻度はTable 2に示す。

対人葛藤に関わった二者の関係ごとに発生原因の割合（Table 2参照）をみると、年中児同士（同年齢）間では、「ルール違反」によって引き起こされた対人葛藤が34%と最も多く、次いで「物の取り合い」原因26%が他の原因に比べて多くみられた。一方、異年齢間においては、年少児と年中児の間で起こった対人葛藤発生原因と、年中児と年長児の間で起こった対人葛藤発生原因とを比較すると、その原因別生起割合は全体的にほとんど同じ傾向を示していた。しかし、異年齢間で生じた対人葛藤に関しては、同年齢間で生じた場合とは違い、当事者の年齢が異なるために、ネガティブな言動を先にとっ

Table 1 幼児の対人葛藤の発生原因カテゴリー

原因の種類	内 容
物の取り合い	物の所有をめぐるもの
不快な働きかけ	身体的攻撃、非難や行為の妨害
ルール違反	規範、一般社会、幼稚園、組におけるルール恣意的遊びの内容について個人的に決められたルール遊びに関する意見のズレ
遊びへの新たな加入者の受け入れ	遊びへの新たな加入者の受け入れの是非をめぐるものや遊びの中の役をめぐるもの
偶発	悪意はなく偶発的な出来事によるもの

Table 2 遊び集団内で発生した対人葛藤の年齢別にみた発生原因の頻度

対人葛藤 / 対人葛藤を起こす原因	当事者の年齢	年少児と年中児		年中児と年長児	
	対人葛藤を起こした側の年齢	年少児	年中児	年中児	年長児
物の取り合い	年中児同士	11(27.50)	4(26.67)	5(20.83)	12(41.38)
不快な働きかけ (妨害)	年中児	3(7.50)	2(13.33)	2(8.33)	2(6.90)
ルール違反	年中児	18(45.00)	3(20.00)	12(50.00)	7(24.14)
遊びに関する意見のズレ	年中児	2(5.00)	4(26.67)	1(4.17)	6(20.69)
偶発	年中児	6(15.00)	2(13.33)	4(16.67)	2(6.90)

* なお、()内は%

た側の年齢がどちらであったかを考慮すべきである。そこで、対人葛藤状況を誘発した側の幼児の年齢を明確にして分類した。その結果、年少児と年中児の間で生じた対人葛藤の発生原因においては、年中児側からと比べて年少児の側から対人葛藤状況を引き起こしていることが多かった。とりわけ、年少児は年中児に対して、多くは「ルール違反」(45%)や「物の取り合い」(28%)によって相手にネガティブな働きかけを行っていた。一方、年中児は年少児に対して、「物の取り合い」(27%)だけでなく、「遊びに関する意見のズレ」(27%)によって対人葛藤を引き起こす働きかけを多く行っていた。それに対して、年中児と年長児の間で起こった対人葛藤発生原因においては、ほぼ年少児と年中児の場合と同様であるといえるが、年中児と比べると年長児の方から対人葛藤状況を引き起こしていることがやや多くみられた。年中児は年長児に対して、「ルール違反」(50%)によって相手にネガティブな働きかけを行うことが多く、年長児は年中児に対して、「物の取り合い」(41%)について「ルール違反」(24%)、「遊びに関する意見のズレ」(21%)によって対人葛藤を引き起こす働きかけを多く行っていた。物の取り合いに関するこれらの結果は、物をめぐる争いが3,4歳児において多い(木下・斎藤・朝生,1985;朝生ら,1986)ことと同様であった。

以上の結果から、自分と相手との対人関係の違いによって対人葛藤の発生する原因が多少異なることが明らかとなった。対人葛藤を引き起こす幼児の年齢に関係なく、年下の幼児が自分より年上の幼児に対して対人葛藤状況を挑発する場合には、特に「ルール違反」によることが

顕著に多く、次いで他の原因と比べると「物の取り合い」原因が多くみられることが明らかとなった。しかしながら、年中児は、年下(年少児)に対しては「遊びに関する意見のズレ」においても自分の意志を多く通そうとしているが、自分より年上(年長児)に対してはこれをほとんど行っておらず、「ルール違反」による対人葛藤状況を多く引き起こしている。この理由として以下の点が考えられる。まず、前者についてであるが、自分より年下の者には自分の意思を通しやすいと判断するが、より言語的な問題解決方略や、あるいは社会的にコンピテントな方略を獲得していると判断する同年齢や年上の者に対しては、自分の欲求が充足されにくいと考えて、遊びに関する意見のズレが他と比較して少なかったのではないかと推測される。後者に関しては、第1に、5歳児頃でも、単純に遊びのルールをよく理解していない可能性を示している(自分より年上の子どもを含めた遊び集団においてのみみられることかもしれない)と考えられる。また、第2に、年下の者がルール違反を行っても、多くは許してもらえたり、強い反発を受けず見逃してもらえることが多いということを、すでに5歳児頃から認知しているために、自分よりも年上の子どもとの遊びの中では、ルール違反を起こすことが多いのではないかと考えられる。しかし、この点に関しては様々な条件との関連が予測できる。なぜならば、本研究で観察した幼稚園は日頃「横わり保育」であるため、異年齢間での遊び集団はそれほど多くは観察されていない。従って、観察された異年齢遊び集団の集団構成員を詳細に観察すると、異年齢関係とはいっても集団を構成しているメンバーはかなり親密な関係であった可

Table 3 社会的問題解決方略の種類

問題解決方略の種類	内 容
① 泣きによる解決	泣く行動
② 攻撃的報復解決	身体的な攻撃行動 (叩く、押す、蹴る) 非言語的な報復行動 (物の略奪、獲得、やり返し) 敵意ある言語的攻撃 (「バカー」、悪口をいう)
③ 第三者介入解決	第三者に問題解決を求める他者依存的な行動 (保育者を呼ぶ・いう・援助を求める、友人にいう)
④ 主張的解決	言語的交渉を手段とする自己の意志を相手に伝達する行動 (禁止「やめて」、要求「返して」、権利の主張「私の順番」、説得「～だから～して」)
⑤ 威嚇解決	非言語的な相手をにらみつける威嚇の行動
⑥ 消極的解決	状況の回避、逃避
⑦ 協調的解決	一緒に遊ぶ、交互に使用する、許可 (許してあげる) 譲歩 (妥協案、貸す等の両者が合意するような言動)

Table 4 対人葛藤を起こした相手の年齢別にみた、受け側の対人葛藤開始時で用いた問題解決方略の使用頻度

対人葛藤当事者の関係 問題解決 / 対人葛藤を起こ した相手の年齢	同年齢間	異 年 齢 間	
	年中児	年少児 (年下)	年長児 (年上)
① 泣きによる解決	7(8.24)	4(10.00)	6(20.69)
② 攻撃的報復解決	20(23.53)	2(5.00)	2(6.90)
③ 第三者介入解決	13(15.29)	2(5.00)	4(13.79)
④ 主張的解決	32(37.65)	17(42.50)	5(17.24)
⑤ 威嚇解決	4(4.71)	7(17.50)	2(6.90)
⑥ 消極的解決	3(3.53)	2(5.00)	9(31.03)
⑦ 協調的解決	6(7.06)	6(15.00)	1(3.45)

※なお、()内は%である。

能性があり、その親密性要因が影響して、上述したように、年上の仲間に対してルール違反を行っても受容してもらえらるというような甘えが生じていたのかも知れない。今後は、これらの問題点をさらに明らかにするため、親密性の要因を統制したうえでの検討が必要であろう。

対人葛藤場面における幼児の問題解決方略

同年齢および異年齢のどちらをも含む遊び集団内で発生した対人葛藤を観察し、年中児が対人葛藤を引き起こす原因となる行為を起こした際、ネガティブな行為を受けた側が用いた問題解決方略をTable 3に示す7つのカテゴリーに分類した。その対人葛藤関係の年齢別にみた方略の

頻度をTable 4に示す。

対人葛藤場面における問題解決方略について

年中児が対人葛藤を引き起こす原因となる行為を起こした際、ネガティブな行為を受けた側が用いた問題解決方略を、対人関係(相手の年齢)別にみた結果、以下の点にそれぞれ他の方略と比べて特徴が認められた。

まず、年中児は、同年齢に対しては、最も④主張的解決方略(38%)で対応することが多く、次に②攻撃的報復解決方略(24%)が多く用いられていた。⑤威嚇解決方略(5%)と⑥消極的解決方略(4%)が用いられることは少なかった。一方、自分より年下の異年齢関係にある年少児に対しては、④主張的解決(43%)が最も多く、同年齢に対するよりも増加している。次に、⑤威嚇解決方略(18%)と⑦協調的解決方略(15%)が多く用いられていたが、②攻撃的報復解決方略(5%)、③第三者介入解決方略(5%)、⑥消極的解決方略(5%)などの方略は用いられることが少なかった。自分より年上の異年齢関係にある年長児に対しては、最も⑥消極的解決方略(31%)が多く、次に①泣きによる解決方略(20%)が多く用いられていた。逆に、⑦協調的解決方略(3%)、②攻撃的報復解決方略(7%)、⑤威嚇解決方略(7%)はあまり用いられることがなかった。

以上の結果より、5歳児頃になると、同年齢の子どもに対しては、主張的解決方略を多く用いたり、主張方略ほど多くは用いないまでも攻撃的報復解決を多く用いて対応していることが示された。前者については、幼児期における言語能力の著しい発達との関連が考えられる。後者については、5歳児は親密性も既知性も高い仲間に対しては、強く自己主張することが多い(山本,1995b)という結果から推測すると、本研究を行った幼稚園が横わり保育であったことが影響(日頃よく遊ぶ仲間の行動や特徴理解との関連)していたことが予測される。その他、異年齢関係の相手の場合と比較して同年齢関係の相手の場合、当事者間の力関係にあまり差を感じておらず(はじめから勝敗が明確になっていない)、欲求充足しやすいとの判断が影響しているのではないかと予測される。つまり、幼児は、同年齢関係にある相手の場合、自己実現しやすい状況であると判断し、欲求達成の意欲をより喚起するために、自己の意志を他者に思う存分表現・発揮できたのではないだろうか。

もしそうであるならば、お互いによく知り合った親しい友人との遊びの中で生じた対人葛藤状況においては、5歳児は言語的手段を用いずに、自分の欲求を身体的で攻撃的な報復行動によって伝達することが多いと言えるかもしれない。そう考察した場合この結果は、同年齢であり同性で、かつ相手のことをよく知っていて親しい間柄の関係になる相手に対しては、より自己主張しやすい(山本, 1995b)ことを示唆するものといえる。一方、自分より年下の異年齢関係にある年少児に対しては、自分の意志を言語的な説明(主張的解決方略)によって行うことが多いと同時に、交互あるいは一緒に使用することを提案する協調的解決方略を多く用いることから、共感性や向社会的行動は、自分より年少の子どもに対して喚起されやすいと考えられる。本研究は、佐藤(1986, 1987)が示したような共通課題においてだけでなく、自他の要求が相対立する対人葛藤場面においても、同様に年長の幼児が年少の幼児に対して援助行動を行うことが多く、協調的方略で問題を解決しようと対応していることを明らかにした。しかし、その一方で、自分よりも年少の子どもに対しては、威嚇解決方略が増加するという結果が示されている。この問題については、メタ認知能力の問題との関連のなかで考える必要がある。今回のこの結果は、5歳頃が表情の効果を理解していることを明らかにしている。また一般に、自分より権力の強い年上の異年齢関係にある年長児に対しては、逃避・回避行動を含む消極的解決方略や泣きによる解決方略を用いることによって争いを避けようとするところから、5歳頃になると、自分より年齢の高い子どもに対しては、力の差を認知しており、比較的自分の欲求が通りにくい状況であることを理解しているものと考えられる。この点は年少児と年中児の関係と異なっている。この理由として、対人葛藤状況において、年少児に対して、年中児・年長児は相手の欲求を受容することが多いが、年中児に対しては、年長児が相手の要求を受容しないことが多いためではないかと考えられる。また、同年齢あるいは年上の子どもに対しては、保育者に援助を求める解決方略がみられるが、年下の子どもに対しては、第三者に依存して問題解決を行ってもらうことが少ない。この結果から、言語を媒介として自分の要求や意志を自己主張できる5歳頃であっても、相手に対して自分の

欲求が通りにくいと感じた場合は、保育者に依存することが多いが、相手が自分よりも年下の場合は、自力で問題解決をはかっていることが示された。これらの結果は、明らかに問題解決方略と対人認知能力の密接な関係を示している。以上より、5歳頃ではすでに、それまでの対人関係の諸情報を記憶しており、それを活用することができ、それによって自己に害が加えられないように有能に問題を解決できる能力がある可能性が示された。従って、本研究の結果は、児童期の異年齢集団行動においては、年少の子どもには、世話や援助をする行動がみられ、同年齢の子どもには、攻撃行動や受容などがみられ、年長の子どもの場合には、依存の要求や援助を求めることを観察したHartup(1978)の結果と同様であり、すでに児童以前の幼児期から、これらの行動がみられることを明らかにしている。ゆえに、子どもがすでに幼児期から、同じ様な状況でも、社会的問題解決方略を、相手が自分と同年齢であるか異年齢(年上,年下)であるかといった自分との対人関係によって使い分けしているといえ、幼児期から異年齢集団において、様々な学習が行われていることが示された。また、Furman(1979)が同年齢集団において孤立して自己概念が低下した孤立した児童に対して行ったように、幼児に対しても異年齢集団の年長児として位置づけることで、孤立児の自己概念や社会的スキルに肯定的な変化を導くことができるかもしれないという可能性をも示したと思われる。

本研究の結果をまとめると、第一に、対人葛藤発生原因の発達的な変異より、幼稚園生活を通して子どもが自己中心的な行動から、集団に適応した行動を獲得していることが明らかになった。第二に、当事者の対人関係が同年齢か異年齢かによって、あるいはネガティブな行為を行った側が自分より年上か年下かによって、対人葛藤の発生原因が異なっていることが示された。第三に、対人葛藤が生じた際に用いられる問題解決方略は、相手の年齢により異なっており、対人関係と深く関連していることが明らかになった。また、対人葛藤の原因や、その問題解決方略選択過程には、当事者同士の年齢が重要な要因となっていることが本研究によって明らかになった。

しかしながら、本研究の対人葛藤事例として今回はデータ数には加算されなかったものの、

客観的にみて、対人葛藤状況が年少児によって導かれた状況でもあるにも関わらず、多くの年中児や年長児がかなり受容的かつ寛容な対応あるいは無視行動（無反応を含む）をとっており、対人葛藤状況にまでも発展しなかった事例がかなり観察された。これには、2つの原因が考えられる。第1には、保育者や両親の指導（しつけ）の影響、第2に、相手を遊び仲間としてどれくらい認知しているかという仲間意識の強さの影響である。つまり、日頃大人から、「自分より年下の子どもにはやさしくしてあげなくてはいけない」という道德観を要求されている子どもたちであれば、年下の子どものネガティブな行為を大目に見るという態度につながるであろう。また、子どもがたとえ近接領域内で、同じ内容の遊びを継続的に行っているとしても（第三者の筆者からはそれが外見的には一緒に遊んでいる状況であると見えたとしても）、あるいは年少児自身は遊びに参加していると意識している状況であったとしても、一緒に遊んでいる子どもが相手を遊び仲間であると認知しているかどうかは不明である。つまり、遊び仲間であると認めている度合いが低ければ、相手がルール違反をしたとしても、また、遊びに関する意見のズレが生じたとしても、相手の行動を肯定も否定もせず、無視する可能性が考えられるのである。今後、この点について詳細に検討する必要がある。また、今回の研究では、対象児が少数であったために統計的に差を検定することができず、割合の比較検討に留まっているため、今後さらに対象人数を増やして事例収集を行い、さらに性差などの視点も加えながら検討を行うことが課題として残された。また、今後、幼児の社会的行動や社会的コンピテンス能力（対人葛藤場面における幼児の対処方略）などを研究していく上で、個々の方略を独立したものとして捉えるのではなく、一連の文脈（エピソード）のなかで検討していくことが重要であると思われる。

引用文献

- 青井教子 1983 乳幼児期の同輩間における「物の所有をめぐる争い」 日本教育心理学会第25回総会発表論文集, 102-103.
- 青井教子 1984 乳幼児期の同輩間における物の所有をめぐる争い(2) 日本教育心理学会第26回総会発表論文集, 240-241.
- 朝生あけみ・木下芳子・斎藤こずえ 1986 4歳児における「けんか」の原因と終結 日本教育心理学会第28回総会発表論文集, 96-97.
- 朝生あけみ・荻野美佐子・斎藤こずえ 1988 0~1歳児クラスにおける子ども同士のいざこざ 日本教育心理学会第30回総会発表論文集, 290-291.
- 東 敦子・野辺地正之 1992 幼児の社会的問題解決能力に関する発達の研究:けんかおよび援助状況解決と社会的コンピテンス 教育心理学研究 40, 64-72.
- 藤森立男 1989 日常生活におけるストレスとしての対人葛藤の解決過程に関する研究 社会心理学研究, 4, 108-116.
- Furman, W., & Rache, D.F. & Hartup, W. W., 1979 Social rehabilitation of low-interactive preschool children by peer intervention, *Child Development*, 50, 915-922.
- Genishi, C., & Dipaolo, M. 1982 Learning thorough argument in a preschool. In L. C. Wilkinson(Ed.), *Communicating in the classroom*. New York : Academic Press. Pp. 49-68.
- Hartup, W. W., 1978 Children and their friends, In M. McGurk(ed.), *Childhood social development*, Methuen, London.
- Hay, D.F. & Ross, H.S. 1982 The social nature of early conflict, *Child Development*, 53, 105-113.
- 本郷一夫・杉山弘子・玉井真理子 1989 保育所における乳幼児のトラブルについて(1) 一物の所有と使用をめぐるトラブルを中心にー 日本教育心理学会第31回総会発表論文集, 143.
- 本郷一夫・玉井真理子・杉山弘子 1992 保育者からみた子ども同士のトラブルの実態と対応(1) 日本教育心理学会第34回総会発表論文集, 82.
- 木下芳子・斎藤こずえ・朝生あけみ 1985 3歳児における「けんか」の成立と発展 日本教育心理学会第30回総会発表論文集, 284-285.
- 倉持清美 1992 幼稚園の中のものをめぐると子ども同士のいざこざ ーいざこざで使用される方略と子ども同士の関係ー 発達心理学研究, 3, 1-8.
- 無藤 隆・内田伸子 1982 幼児初期の子ども同士のいざこざの発生と解消 日本教育心理学会第24回総会発表論文集, 352-353.
- 無藤 隆 1992 子どもたちはいかに仲間か否かを区別するか 科学朝日, 617, 18-23.

- 齋藤こずえ・木下芳子・朝生あけみ 1986 仲間関係の発達 無藤 隆・内田伸子・齋藤こずえ (編著) 子ども時代を豊かに学文社 59-111.
- 佐藤俊人 1986 幼児・児童の言語的コミュニケーションにおける対人認知の影響に関する発達の研究 日本教育心理学会第28回総会発表論文集, 214-215.
- 佐藤俊人 1987 対人認知が幼児のコミュニケーションに及ぼす影響の研究 - 援助行動を中心として - 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 642-643.
- Shantz, C.U. 1987 Conflict between children. *Child Development*, 58, 285-305.
- Shantz, C.U., & Hobart, C.J. 1988 Social conflict and development: Peers and siblings. In T.J. Berndt & G.W. Ladd(Eds.), *Peer relationships in child development*. New York: A Wiley-Interscience Publication. Pp. 71-94.
- 杉山弘子・玉井真理子・本郷一夫 1989 保育所における乳幼児のトラブルについて(2) - 子ども間のトラブルの成立と展開について - 日本教育心理学会第31回総会発表論文集, 144.
- 杉山弘子・本郷一夫・玉井真理子 1992 保育者からみた子ども同士のトラブルの実態と対応 (3) 日本教育心理学会第34回総会発表論文集, 84.
- 高濱裕子 1995 自己主張タイプ児の遊びをめぐる交渉の発達 発達心理学研究, 6, 155-163.
- 玉井真理子・本郷一夫・杉山弘子 1989 保育所における乳幼児のトラブルについて(3) - トラブルに対する保母の働きかけについて - 日本教育心理学会第31回総会発表論文集, 145.
- 玉井真理子・杉山弘子・本郷一夫 1992 保育者からみた子ども同士のトラブルの実態と対応 (2) 日本教育心理学会第34回総会発表論文集, 83.
- 山本愛子 1994 対人葛藤場面における幼児の問題解決方略に関する発達の研究 広島大学教育学部紀要第一部(心理学), 43, 241-249.
- 山本愛子 1995a 幼児の自己調整能力に関する発達の研究 - 幼児の対人葛藤場面における自己主張解決方略について - 教育心理学研究, 43, 42-51.
- 山本愛子 1995b 幼児の自己主張と対人関係 - 対人葛藤場面における仲間との親密性及び既知性 - 心理学研究 66, 205-212.
- 山本多喜二・ワップナー,S. 1991 人生移行の発達心理学 北大路書房.

なお、本研究は、1994年度の幼児心理学実地研究において収集したデータの一部を分析し直したものである。

謝 辞

本研究を行うにあたり、ご協力いただきました広島大学附属幼稚園の諸先生方と園児の皆さん、また、執筆にあたりご指導を賜りました広島大学教育学部教授山崎 晃先生に心よりお礼申し上げます。